

## 最後の授業

アルフォーンズ・ドーデ

その朝は、学校へ行くのがたいへんおそくなったし、アメル先生から文法の質問しつもんをされると言われていたのに、わたしはなにも勉強していなかったの、しかられるのがこわかったのです。

それで、学校を休んでどこかへ遊びにいこう、と考えました。

空はよく晴れてあたたかでした。

森のなかでは、つぐみが鳴いていまし、リベールの原っぱからは、木こびき工場のうしろでプロシャの兵隊へいたいたちが訓練しているのがきこえます。森へいこうか、原っぱへいこうか、どれも、文法の規則きそくよりはわたしの心をひきつけました。けれど、やっとこのゆうわくにうち勝って、いそいで学校へむかってかけだしました。役場のそばをとおると、金網を張った小さな掲示板けいじばんの前に、おおぜいの人かなあみが立ちどまっていました。二年ほどまえから敗戦はいせんとか、挑発ちょうはつとか、司令部の命令しれいぶとかいうやなしらせは、みんな、ここにけ掲示けいじされることになっていました。わたしは歩きながら考えました。

〈こんどは、なんのしらせかしら？〉

そして、小走りとおりすぎようとする、そこで、弟子といっしょに掲示を読んでいたかじ屋のワシュテルさんが、大声でわたしに言いました。

「おい、ぼうや、そんなにいそがなくなっちゃっていいさ、どうせ学校にはおくれっこないんだから！」

かじ屋のおじさん、わたしをからかっているんだな、と思ったので、わたしは息をはずませて、学校の間をくぐりました。

いつもなら、授業のはじまりはたいへんなさわぎでした。つくえをばたばたあけたりしめたりする音や、日課を暗記しようと、耳を手でふさいで大声でくりかえしている声やら、「さ、すこし静かに！」と、じょうぎでつくえをたたきながら叫ぶ先生の声が往来まできこえていたものでした。

わたしは、みんながこうしてさわいでいれば、だれにも気づかれないで、そっと自分の席につくことができるだろうと思いました。ところがその日は、なにもかもひっそりとして、まるで、日曜の朝のようでした。あいている窓ごしになかを見ると、クラスの者はみんな自分の席についていますし、アメル先生が、あのおそろしいじょうぎをかかえて、いったりきたりしていらっしゃいます。戸をあけて、この静まりかえったまっただなかに入らなければならないことを思う、なんだかはずかしいような、こわいような気がします。

ところが、大ちがいでした。アメル先生は、おこるどころか、わたしを見ると、やさしい口調で、こう言われました。「フ란ツか。早く席につきなさい。もうこないのかと思って、はじめるところだった。」

わたしは、すぐに席につきました。そして、おそろしさがおさまると、わたしは、先生が視学館しがくかんのくる日とか、卒業式の日でなければ着ない、りっぱな緑色のフロックコート（上着丈うわぎたけの長い、男性用の礼服だんせいよう れいふく）を着て、こまかくひだをとった、はばのひろいネクタイをしめ、ししゅうをした、黒い絹きぬのふしなし帽ぼうをかぶっていらっしゃるのに気がつきました。それに、教室全体に、なにかふしぎなおごそかさがみなぎっていました。

いちばんおどろかされたのは、教室の後ろのほうの、いっつもはあいている席とでした。三角帽さんかくぼうをもったオゼールじいさんや、もとのざいじょう村長さんかくぼうさんや、郵便屋ゆうびんやさんの顔もみえます。そのほかにも、おおぜいの人がいいましたが、みんな悲しそうでした。オゼールじいさんは、表紙のいたんだ古い読本どくほんをもってきていて、ひざの上にひろげ、大きなめがねをそのうえにおいていました。

わたしがいろいろのことにびっくりしているまに、アメル先生は教壇きょうだんにあがって、わたしをむかえたときと同じような、やさしい重みのある声で話されました。

「みなさん、わたしが授業をするのは、これが最後になりました。アルゼスとロレーヌの学校では、ドイツ語しか教えてはいけないという命令が、ベルリンからきたのです。新しい先生が、明日、おみえになります。今日はフランス語の最後の授業です。どうか、よく注意してきてください。」

わたしはびっくりしました。さっき役場に掲示してあったのは、このことだったのでしょ。

ああ、フランス語の最後の授業！

それなのに、わたしはまだフランス語がやっと書けるくらいです。では、もう、習うことはできないのでしょうか。フランス語をもっと勉強することは、できなくなったのでしょうか。

ああ、どうしてわたしは、いままで教室で、あんなにぼんやりしていたのだらう。鳥の巣をさがしまわったり、氷すべりをするために学校をずるけたことを、自分ながらうらめしく思いました。さっきまで、あんなにじゃまだった文法の本や聖書などが、いまでは、別れたくないむかしなじみの友だちのように思われました。アメル先生にたいしても、同じような気持ちを感じました。先生はどこかへいってしまうのだ、もう会うことはできないのだ、と思うと、先生にしかられたり、じょうぎで打たれたことも、わすれてしまいました。

ああ、おきのどくな先生！

先生は、この最後の授業のために、着かざってこられたのでした。わたしは、なぜ村の老人<sup>じゆきやう</sup>たちが、教室にきて後ろのほうにすわっているのかが、わかりました。どうやら、この学校にあまりたびたびこなかったことをくやんでいるようです。

村の人たちは、また、先生の四十年ものあいだの苦勞を感謝し、かえっていかれる祖国<sup>そこく</sup>にたいして敬意<sup>けいい</sup>をあらわすためにきたのでしょうか……。

わたしが、こうしてじいっと考えこんでいるとき、とつぜん、わたしの名まえが呼ばれました。わたしの暗唱<sup>あんしょう</sup>の番がきたのです。わたしは最初からまごついてしまって、立ったまま悲しい気持ちで、頭もあげられず、もじもじしていました。アメル先生の静かな声が、きこえてきました。

「フランツ、わたしはしかりません。自分でよくわかるでしょう。『いま勉強しなくても、勉強するときはじゅうぶんある。あした勉強しよう』などというのが、わたしたちの口ぐせでしたね。そしてそのため、どうなったかおわりでしょう。今日勉強にのぼす、これがアルゼスの大きな不幸だったのです。いま、ドイツ人たちに、こう言われてもしかたありません。『どうしたんだ、おまえたちはフランス人だと言いはっていた。それなのに、フランスの言葉を話すことも、書くことも、さっぱりできないじゃないか』。この点で、フランツ、あなたがいちばん悪いというわけではありません。わたしたちみんなが悪かったのです。みんなに責任<sup>せきにん</sup>があるのです。」

アメル先生は、また続けられました。

「あなたがたのおとうさんやおかあさんがたは、子どもたちが教育を受けることをあまりのぞまなかったのです。すこしでも金<sup>かね</sup>になれば、というわけで、畑や工場にいかせたがりました。いえ、こういうわたし自身にも、責任<sup>せきにん</sup>があります。勉強の時間に、あなたがたに花に水をやらせたこともあり、わたしがアユつりにいきたいために、あなたがたに休みをあたえたこともありました。」

それからアメル先生は、フランス語についてつぎからつぎへと話をなさいました。フランス語が世界でいちばん美しい、いちばんはっきりした、いちばん力強い言葉であることや、ある民族<sup>みんぞく</sup>がどれいとなっても、その国語をもっているうちは、その牢獄<sup>ろうごく</sup>のかぎをにぎっているようなものだから、わたしたちの間でフランス語をよく守りとおして、けっしてわすれないようにしなければならないというお話でしいた。

それから、先生は、文法の本を開いて、今日のけいこのところをお読みになりました。わたしはあまりよくわかるので、びっくりしました。先生がおっしゃたことは、わたしには、たいへんやさしく思われました。わたしがこれほど注意してきいたことははじめてでしたし、先生がこれほどしんぼう強く説明されたことも、いままでありませんでした。先生は、この土地を去っていくまえに、知っていることをすっかり教えて、いっぺんにわたしたちの頭のなかへつめこまうとしていらっしゃるように思われました。

本を用意しておいてくださいました。それには、まるみをおびた、きれいな字で、《フランス、アルゼス、フランス、アルゼス》と書いてありました。そのお手本はまるで、小さな旗がつくえのくぎにかかって、教室じゅうに、ひるがえっているように見えました。わたしたちは、いっしょうけんめいでした。みんな、しいんと静まりかえっています。ただ紙の上をペンの走る音がきこえるばかりです。とちゅうで一度窓からこがね虫が一ぴき入ってきましたが、そんなものに気をとられる者は、ひとりもいません。村の人といっしょに、おさない子どもまでが、一心に紙の上に線を引いていました。まるでその線のひとすじひとすじが、フランスの言葉であるかのように、まじめに、心をこめて書いているのです。学校の屋根の上では、ハトが静かに鳴いていました。わたしはその声を聞いて、〈今に、ハトまで、ドイツ語で鳴かなければならないのじゃないかしら？〉と思いました。

ときどきページから目をあげて見ますと、アメル先生は教壇きょうだんの上に立って、あたりを静かにながめていらっやいます。まるで、小さな校舎こうしゃをみんな目のなかにおさめようとしていらっやるようです。むりもありません。四十年もの長い間、ここで、すこしもかわらないこの教室で、教えてきたのですもの。ただかわったのは、つくえやこしかけが、使われている間に、こすられ、つやが出てきたぐらいものです。庭のクラミの木は大きくなり、先生の手植えのヒイラギが、いまは窓の外に美しくげって、屋根までと

どくくらいになっています。こういうすべてのものと別れるということは、先生にとっては、どんなに悲しいことでしょう！二階では、先生の妹さんが荷造りをしていらっしゃいますが、そのゆききする足音をきいて、先生は、きっと、胸のつぶれるような思いをされているでしょう。明日は、いよいよ出発です。永遠に、この土地を去らなければなりません。

それでも先生は勇気を出して、最後まで授業を続けられました。習字のつぎは、歴史の勉強でした。それから小さな生徒たちは、みんないっしょに読み方のけいこをはじめました。読本を両手にもって、生徒たちといっしょに文字をひろい読みしていました。いっしょうけんめいなのがわかります。じいさんの声は、感激のわたしたちはみんな、笑いたくなり、泣きたくもなりました。

ああ、この最後の授業を、わたしは一生わすれることができません……。

とつぜん、教室の時計が十二時を打ちました。つづいてアンジェリュスの鐘がきこえてきました。それと同時に、訓練からもどるプロシャ兵隊のラッパが窓の外からひびいてきました。アメル先生は、ずっと教壇に立ちあげられました。頭は真っ青です。先生がこんなに大きく見えたことはありませんでした。

「みなさん」と、先生は言いました。

「みなさん……わたしは……わたしは……。」